
生きている証

藍村 泰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生きている証

【Nコード】

N1253K

【作者名】

藍村 泰

【あらすじ】

今ここにいることが、生きている証。決して踏みにじられない証。

世界は闇に包まれていた。

言葉は誤解を生む。これではただ単に夜だと述べているようだ。的確に言おう。私にとつての世界は真っ暗だった。

夢とか希望、何も見当たらない。自分は何のために生まれてきたんだろうと考え、虚しくなる。何かに没頭するなんて出来なくて、そんな自分を嫌悪する。悪循環だとわかっていても、単調な日々から脱け出せない。食べて、寝て、生活するために働く。

苦しい、苦しい、苦しい。

自分はこんなところで埋もれていていいのかと声がする。だが、情熱はたぎらず、ただただ溶けていく。

私自身がどうしたいのかもわからない。

大切なものなんてない。

多分、私は今抱えているものの全て、飽きた瞬間放り出すのだろう。最低で構わない。歪んでいく。

「それでもキミは生きてるじゃないか」

静かに沈黙を守っていた矢上香哉やがみこうやは呟いた。西陽の射し込む私の部屋には物があまりないため、少し寒い。

「大体、人間は動物なんだ。食べて寝て、そして生きるために働く。その行動をしているにも関わらず、どうしてもしてないと思うのかボクにはわからないな」

矢上は窓ガラスを背凭れにして体操座りをしている。彼の目は心底不思議そうに私を写し出した。

「だって……夢や希望もない。毎日が虚しい」

こうして休日、何もせずに家にいると必ず襲ってくる虚しさは私を苛みさいな、苦しめる。そこから生まれた焦燥感ジレンマは、喉を掻きむしりたくなる衝動を与える。

矢上は冷笑した。寒い部屋がますます殺伐とした空気になった。

「夢や希望なんてなくても生きていけるし、虚しくなんか無い。じやあ尋ねるけど、野生の狼は子供を生んで狩りをし、眠る。それ以外に何かしているかい？ 彼らはそれで満たされている。本能が満たされるからだ」

「狼と人間は違うでしょう。人間は考える。自分に何ができるかって」

「烏滸おしがましい。遅かれ早かれ生き物は死ぬんだ。何か功績を遺さないといけないなんて誰が決めた。今歴史に名を連ねてる人々は、ただ死ぬまでの暇潰しをしてたらまたま功績が遺っただけだろう」
「そんなことわかってる。けど、虚しい想いは消えない」

切り返し、切り返され、言葉は何度も二人の間を往き来した。矢上の棘のような言葉は私には理解出来ない。

彼は緩く首を振り、

「わかってない。話を聞いていてわかった。キミはね、暇潰しが不得手なんだよ。というか、義務感に囚われ過ぎている」

と口にした。どこか馬鹿にした口調だった。

「どうということ？」

「暇潰しって、手っ取り早く言えば、充実感を得るってことだとボクは思う。要するに、仕事が充実している人は趣味を持たなくてもいい。満たされればいいわけだから。無理に何かしなくちゃと思うから苦しい。だから、キミは堕ちたような感覚に陥ってしまう。本当に堕ちた奴はね、生きようとしなくていい奴だよ。飯を食わない、寝ない、働かない」

「でも……………」

「でも」が多いよね、キミ。どうせ、人に自分を理解して欲しいんだけど誰も自分を理解出来はしないとか思ってるんだろう。自分は特別だとも言いたいんだったらどうぞご勝手に。思っている程、人間って奥深くないんだよ。ペラッペラ」

今の言い分にはカチンと来た。社会に出て間もない身分で、よく

もそんなことを言えるものだ。私はすかさず反論した。

「それは違うと思う。……あなたが出会ったことがないだけで、傷を持って、それでも生きている人だっている。たくさんいる」

私が言い切る前に乾いた笑い声上がる。

「傷を持つてゐるから何。その傷があれば奥深くなるとでも言いたくないだつたら反論するよ。傷は傷でしかない」

彼が何を言っているのか、言いたいのかわからない。伝わっていない。

「あなたと話していたら、ますますわからなくなってきた」

「お褒めにあずかり光栄です」

「まあ、別にいいけど。興味ないし。どうでもいい」

今まで嘲りきつた表情をしていた矢上の顔に変化が現れた。急に真顔になられて少しだけ戸惑う。

「自分には感情がない……機能してないですと遠回しに言うのはやめてくれるかな。感情がないならとつくの昔にキミ死んでるよ。死への恐怖もないはずだから。つくづく馬鹿馬鹿しいよね、キミの悩み。寝たら？」

露骨に、剥き出しのまま放たれた刃は私を突き刺した。

「あんたになんて話すんじゃないかった。苛つただけで何の答えも見つからなかった」

「ボクも、最高の暇潰しになると思って聞いてたのに、時間の浪費だつたよ。ただの喜劇じゃないか」

「……私、真剣に悩んで……」

「つまらない悩みを考え出したら寝ること」

ボクは眠いと言って欠伸をした矢上の頬を思いきり叩き、息をあらげて立ち上がった。

「つまらなくなんてない！ 私は今、自分の存在意義さえわからなくなっているのにつ」

気がついたら叫んでいた。自分に歯止めが効かない。

「存在意義とは大きく出たな。安心して。その答えは一生かかっ

ても出ないから、気長に寝て食べて働けばいい」

多分、相当痛んでいるであろう左頬を擦りながら、矢上も立ち上がった。いつの間にやら外は暗黒に染まっている。

「わかんない。あなたの言ってることなんてこれっぽっちもわかんない」

耳を塞ぎ、蹲った。

「頑固者が」

頭上から腹の底から憎しみ込めて紡ぎ出したような声が降り注いだ。

ボクは苛立ちを抑えきれずに彼女の部屋を後にした。何なんだ、あの思想は。どこかのパフォーマンスーに喚起かんきされたと思えない。

人間誰しも自分は特別なのだという妙な自信を持っているというが、しかし。その想いの強すぎる人間が、自分が特別でないことを知った時、彼らの精神はフライトフライドはズタズタの粉々になってしまふらしい。

ボクは、単純に彼らを馬鹿だと思う。

一日一日着実に死へと向かっているんだ。皆誰しも。ただそれが短いか長いかの差だけ。蜻蛉かげろうは三日で死んでしまふと人間は夢むけれど、蜻蛉にとってそれは当たり前で。三日の命を謳歌おうかする。

「俺はまだ何もやっていない」と死ぬ間際に父さんは言った。だが、本当は彼は成し遂げていたのだ。食事をし、寝て、生きるために働く。それが生きた証。生きたことが生きた証。名誉も名声も生きた証にはなり得ない。それらはただの“残骸”なのだから。

彼女がそれに気づくことは一生ないかもしれない思いながら、家路を辿った。夕食は何だろうかと想像しながら歩くのは、とても楽しかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1253k/>

生きている証

2010年10月8日15時24分発行